

ジャカルタにおけるトバ・バタック人の婚姻関係とアイデンティティ

平成20年入学

参加したフィールドスクール：インドネシア・フィールドスクール

調査地（調査国）：ジャカルタ，インドネシア

平田生子

キーワード：都市移住，アイデンティティ，マイノリティ，婚姻関係，宗教

本研究の目的は、ジャカルタにおけるトバ・バタック人の民族意識を保持させている根底にあるものはなにかを解明することにある。

バタックは、人口約600万人（インドネシア総人口の2.5%）の北スマトラの高地を故地にもつプロトマレー系の民族集団であり、最大のサブ・グループはトバである。世界最大のイスラム国家であるインドネシアにおいて、トバ人口の9割をキリスト教徒が占める。

バタックの都市移住には大きく分けて2つの時期がある。その第1波は独立後の1950年代におけるエリートの教育を目的とした移住、第2波は、1960年代末の政治的混乱期での就労目的による移住である。多民族都市で民族的、宗教的マイノリティとして生きるなかで、なお次世代に継承されるものこそが、民族意識を保持させるうえで重要な役割をになうものだと考えられることから、ジャカルタを調査地とすることに意義がある。

強固な父系理念を有するバタック人は、都市部においてもなお伝統的慣習を保持している。しかし、儀礼的に交換される贈物の出費者と提供者の不一致、婚資の使用目的など、儀礼の手順や内容は、時代や場所により常時変化しているが[Bruner 1972:208]、贈与形態や関係性は強固に保持されている。

日常生活における人間関係に着目すると、民族意識、親族関係を保持させ、なおかつ信仰の一致による心の拠りどころを提供する場として、サブ・グループごとに設立されたバタック民族教会が中心的な場となっている。

フィールドスクールから得られた知見について

今回のフィールドスクールでは、農村に5日間ホームステイし、住民の暮らしや隣接するウジュン・クロン国立公園の管理形態、また観光化に向けた住民グループの組織化について、代表者から話を伺ったり、レンガや木彫工芸品の製作過程を見学することができた。

観光地化のなかで、住民が国立公園という財産を自分たちの生活向上のためにいかに役立てることができるのかを、住民組織のリーダーが中心となり模索していた。しかし、政府の一方的な国立公園の境界線引きによる土地問題や、支給した政府助成金が住民組織内でうまく循環していない現状、そして住民組織内の職分配の不平等さなど、政府と住民の意見の相違や村内での方向性の違いなどが生じ、一筋縄にはいかない現状があった。

ひとりの意見だけでなく、さまざまな立場の人々の話を伺った後、他の参加学生や先生方、インドネシア人スタッフの方々との意見交換や補足説明の時間をつくっていただいた。それにより、表面上

は順調に機能しているように見える組織も課題は山積みである，という実情をよりよく理解することができた。

また，村の人々は，問題点や不満を私たちにすべて話してくれるはずもなく，私たちはあくまで「数日間滞在するよそ者」である事実は払拭できなかった。本音を聞きだすための関係構築の重要性を感じることができたことも今回学んだことのひとつである。

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

村内は2，3ある民族ごとに職業や家屋のデザインにもそれぞれ特徴がみられ，村レベルでも，また同じイスラム教徒であっても，民族ごとに明白に住みわけがされている状況を目にした。ひとつの民族を調査するうえで他民族についても熟知する必要があることを再認識した。

またFSC参加前の調査では，焦りから自分の研究と関連のない事柄は深く追求しようとしていなかったもので，小さな疑問を見逃さず不明点を徹底的に追及するという，基本的だが重要な姿勢を先生方から学べたことも大きな収穫であった。例えば，家屋に用いられる竹ひとつとっても，その竹の生息地，機能性，デザイン，その土地の気候，文化，歴史などさまざま分析から，竹が木材として使用されている現象について考察することができる。

色眼鏡で物事を決めつけず，すべてを吸収する柔軟さが新しい発見をうむ。しかしそれには，多面的に考察するための知識と想像力をかねそえることの必要性もまた，同時に痛感した。



写真1：田園風景。用水路へのアクセスの差により，一期作と二期作の水田がある。



写真2：海面に浮かぶバガンとよばれる竹でできた漁護機材。
集魚灯を用いるため、満月の前後数日は月明かりがまぶしく、不漁となる。



写真3：国立公園内に生息するジャワサイをモチーフにした木彫工芸品の製作過程。